

2010年度

入学試験問題

国語

(時間 50分)

注意事項

1. 指示があるまで、問題用紙は開かないこと。
2. 問題は **一**～**四** の4問あります。
3. 「解答用紙」は表紙の裏側になっています。
4. 「解答用紙」には答えと、受験番号、氏名だけを記入しなさい。

一 次のそれぞれの問いに答えなさい。

問一 次のことわざの空欄に入る言葉をあとのア～ソの文字を組み合わせて作り、その語順の通りに記号で答えなさい。

- 1 矢のごとし 2 渡る に鬼はない 3 待てば海路の あり
- 4 の灯火 5 三人寄れば の知恵

ア 日 イ 殊 ウ 見 エ 背 オ 間
カ 半 キ 光 ク 和 ケ 陰 コ 紋
サ 風 シ 文 ス 前 セ 人 ソ 世

問二 次の各組のカタカナ部の同訓異字について、それぞれ正しい漢字を記しなさい。

- 1 a 電車を乗りかえる
b 負傷した選手をかえる
c 物の見方をかえる
- 2 a 違う場所にウツす
b 姿を鏡にウツす
c 注意事項を手帳にウツす
- 3 a カたい表情で待つ
b 手ガたい商売で稼ぐ
c カたい契りをかわす

問三 次の四字熟語の空欄にあてはまる漢字をそれぞれあとのア～コから選び、記号で答えなさい。

- 1 自業自 2 離滅裂 3 時代錯 4 空前絶 5 山 水明

ア 身 イ 後 ウ 得 エ 支 オ 徳
カ 句 キ 私 ク 紫 ケ 誤 コ 乱

二 二 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

① 子どものときから、忘れてはいけない、忘れてはいけない、と教えられ、忘れたと言っては叱られてきた。そのせいもあって、忘れることに恐怖をいだき続けている。悪いときめてしまう。

学校が忘れるな、よく覚えろ、と命じるのは、それなりの理由がある。教室は知識を与える。知識をふやすのを目標にする。せつかく与えたものを片端から、捨ててしまつては困る。よく覚えておけ。覚えているかどうか、ときどき試験をして調べる。覚えていなければ減点してケイコクする。② 点がいい方がいいにきまつているから、みんな知らず知らずのうちに、忘れるのをこわがるようになる。

教育程度が高くなればなるほど、そして、頭がいいと言われれば、言われるほど、知識をたくさんもっている。つまり、忘れないでいるものが多い。頭の優秀さは、記憶力の優秀さと同じ意味を持っている。それで、生き字引というような人間ができる。

A ③ ここで、われわれの頭を、どう考えるかが、問題である。

これまでの教育は、人間の頭脳を、倉庫のようなものと見てきた。知識をどんどん蓄積する。倉庫は大きければ大きいほどよろしい。中にたくさんものが詰まっていればいるほどケツコウだとなる。

せつかく蓄積しようとしている一方から、どんなものがなくなつて行つたりしてはことだから、忘れるな、が合言葉になる。ときどき在庫検査をして、なくなつていないかどうかをチェックする。それがテストである。

倉庫としての頭にとっては、忘却は敵である。博識は学問のある証拠であつた。ところが、こういう人間頭脳にとつて恐るべき敵があらわれた。コンピューターである。これが倉庫としてはすばらしい機能をもっている。いったん入れたものは決して失われない。必要なときには、さと、引き出すことができる。整理も完全である。

コンピューターの出現、普及にともなつて、人間の頭を倉庫として使うことに、疑問がわいてきた。コンピューター人間をこしらえていたのでは、本もののコンピューターにかなうわけがない。

④ そこでようやくソウゾウ的人間ということが問題になつてきた。コンピューターのできないことをしなくては、というのである。

人間の頭はこれからも、一部は倉庫の役をはたし続けなくてはならないだろうが、それだけではいけない。新しいことを考え出す工場ではなくてはならない。倉庫なら、入れたものを紛失しないようにしておけばいいが、ものを作り出すには、そういう保存保管の能力だけでははたがない。

だいいち、工場にやたらなものが入っているのは作業効率が悪い。よけいなものは処分して広々としたスペースをとる必要がある。それかと言って、すべてのものをすててしまつては仕事にならない。整理が大事になる。

倉庫にだって整理は欠かせないが、それはあるものを順序よく並べる整理である。それに対して、工場内の整理は、作業のじゃまになるものをとり除く整理である。

この工場の整理に当たることをするのが、忘却である。人間の頭を倉庫として見れば、危険視される忘却だが、工場として能率をよくしようと思えば、どんどん忘れてやらなくてはいけない。

B そのことが、いまの人間にはよくわかっていない。それで工場の中を倉庫のようにして喜んでいる人があらわれる。工場としても、倉庫としてうまく機能しない頭を育ててしまいかねない。コンピューターには、こういう忘却ができないのである。コンピューターには倉庫に専念させ、人間の頭は、知的工場に重点をおくようにするのが、**C** これからの方向でなくてはならない。

それには、**D** 忘れることに対する偏見を改めなくてはならない。そして、そのつもりになってみると、忘れるのは案外、難しい。

(中略)

勉強し、知識を習得する一方で、不要になつたものを、処分し、整理する必要がある。何が大切で、何がそうでないか。これがわからないと、古新聞一枚だつて、整理ができないが、いちいちそれを考えているひまはない。自然のうちに、直観的に、あとあと必要そうなものと、不要らしいものを区分けして、新陳代謝をしている。

頭をよく働かせるには、この **E** が、きわめて大切である。頭を高能率の工場にするためにも、どうしてもたえず忘れて行く必要がある。

F 忘れるのは価値観にもとづいて忘れる。おもしろいと思つてゐることは、些細なささいことでもめつたに忘れない。価値観がしっかりしていないと、大切なものを忘れ、つまらないものを覚えてゐることになる。これについては、さらに考えなくてはならない。

(外山滋比古『思考の整理学』より)

問一 〓線①～⑤のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに改めなさい。

問二 〓線A「われわれの頭を、どう考えるかが、問題である」とあるが、筆者は、「われわれの頭」を今後どのようにするべきだと考えているか。本文より十二字で抜き出して答えなさい。

問三 〓線B「そのこと」が指す内容について、最も適するものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 頭を倉庫と考え、整理スペースをとっておくことの大切さ。

イ 頭を工場と考え、よけいなものを処分整理することの必要性。

ウ 頭を工場と考え、忘却を整理と同じ意味とする思考。

エ 頭を工場兼倉庫と考え、整理忘却することの必要性。

問四 〓線C「これからの方向」とはどのようにすることか。文中の語を用いて答えなさい。

問五 〓線D「忘れることに対する偏見」は、どのような考え方から生まれるか。本文の表現を用いて答えなさい。

問六 空欄 E には五字の言葉が入る。本文より抜き出して答えなさい。

問七 〓線F「価値観」とはどういうことか。具体的に述べられている部分を十五字で抜き出して答えなさい。(句読点を含む)

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(故郷を離れて都会の高校に入学する「ぼく」の入寮手続きが終わった。父は家に帰ることになり、「ぼく」は父を駅まで送って行く。)

あとは駅までダマ^①ったままだった。駅前の食堂へ入って玉子ドングリを食べるあいだも、ほとんど喋らなかつた。食べ終わったあと父ちゃんは皺^{しわ}だらけの札を何枚か出して折りたたみ、ぼくによこした。

——いまこんだけしか置いてけんけど、近いうちにまた何とかして送っから。

A
父ちゃんは壁の献立て表を見て言った。恥ずかしそうな眼をしていた。ぼくは大きくうなずいておカネを受け取り、汽車賃あるの？ と聞いた。まわりに客はいなかつた。父ちゃんが、大丈夫だ、と言ってテエブルの上にある伝票を覗^{のぞ}き込んだ。ぼくは父ちゃんからもらったおカネを丸めるようにして手のひらの中に握り、その手をしばらくテエブルの上へ置いたままにした。ポケットへしまうのが B
食堂を出たところで、父ちゃんが思いついたように腕時計をはずしてぼくに差し出してきた。

——ないと不便だべ。

父ちゃんが時計を見て言った。

——いらん、父ちゃん困るべさ。

ぼくも時計へ視線をやって首を横に振った。革バンドの穴が破れている。しかし父ちゃんは、いいから持ってる、と言って時計をぼくの手へ押しつけてきた。

駅の改札がはじまり、父ちゃんが人の列の後ろへ並ぶ。ぼくもわきについていっしょに歩く。父ちゃんとぼくの背丈は、もうほとんど同じだった。眼が何度も腕時計をした左の手首へ行く。その皮膚が熱^②っぽかつた。腕時計を持つのは初めてだった。

父ちゃんに向かって何か言うことがある気がするのに、言葉がわからなかつた。それで改札をしている駅員の顔ばかり見つめる。父ちゃんの顔もそのほうへ向いていた。あと五、六人で父ちゃんの番がくるところでぼくは、母ちゃんに元気でやるからって、とだけ言った。かすれ声になった。父ちゃんがぼくを見、からだ気いつけてな、と言った。言っている途中から父ちゃんの唇が細かく震えて歪^{ゆが}んだ。父ちゃんはすぐに顔をカクすようにして前を向いてしまった。耳たぶが赤かつた。

ぼくはそこで立ちどまつた。改札口を通過してホオムへ出た父ちゃんが人波にもまれながら一度、ぼくを振り返った。口が小さくあいたのが

見えたが声は聞こえなかった。眼が光っていた。ぼくは下唇をきつく噛んで父ちゃんを見ていた。父ちゃん、と呼ぼうとしたが喉が詰まった。みたいに出なかった。一瞬、走って行っていっしょに汽車に乗りたいたいと思う。父ちゃんの姿はすぐ人混みに押されて消えてしまった。

(小檜山 博『地の音』より)

問一 〓線①～③のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに改めなさい。

問二 〓線A「父ちゃんは壁の蹴立て表を見て言った。」の理由として適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 息子との別れを悲しむ顔を見せなくなかったから。
- イ 今日から息子が何を食べるか気がかりだったから。
- ウ 息子に十分な金を渡せないのが心残りだったから。
- エ 立派になった息子を見るのが照れくさかったから。

問三 空欄 B に入れるのに最も適切な語を、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア いやだった
- イ 惜しかった
- ウ 面倒だった
- エ つらかった

問四 この文章は場所を中心にして分けると三場面になる。第二、第三の場面はそれぞれどこからか、最初の五字を本文中から抜き出して答えなさい。

問五 改札が始まってからの「ぼく」の感情の高まりが、もつともはつきりと表れている一語を、本文中から抜き出して答えなさい。

問六 この文章の父と子の気持ちについて説明したものとして適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 父子ともに、気持ちがうまく伝わらずにいらだっている。
- イ 話すことは少ないが、父と子とともにいたわりあっている。
- ウ 子は父の愛情を十分感じ取りながらも、迷惑がっている。
- エ 父は子の遠慮のない応対ぶりに安心しきっている。

四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

※ 岩鼻やここにもひとり月の客 ※ 去来 ※

※ 先師上洛の時、去来いはく、酒堂はこの句を月の猿と申しはべれど、予は客まさりなんと申す。いかがはべるや。先師いはく、猿とは何事ぞ。汝この句をいかに思ひて作せるや。去来いはく、明月に山野を吟歩しはべるに、岩頭一人の騷客を見つけたると申す。先師いはく、ここにもひとり月の客と、己と名のり出でたらんこそ、いくばくの風流ならん。ただ自称の句となすべし。この句はわれも珍重して、笈の※小文に書き入れけるとなん。予が趣向はなほ二三等もくだりはべりなん。先師の意をもつて見れば、少し狂者の様も浮みて、はじめの句の趣向にまさること十倍せり。まことに作者その心を知らざりけり。

〔去来抄〕より

※ 岩鼻……岩頭、岩の端。 月の客……月見をしている風流な人。 去来……江戸時代の有名な俳人。

先師……亡き先生。 上洛……京都に行くこと。 酒堂……近江膳所に住む医者で、去来と同じく先師の弟子。

騷客……風騷の人。 風流人。 笈の小文……先師が自分の句や門人の最もすぐれた句を選んでおいた句集

趣向……構想 狂者……風流に凝りすぎた風変りな人。 軽んじた言い方ではなくむしろ敬意を含んだ意

問一 「岩鼻や・・・」の句の、季語と季節と切れ字を答えなさい。

問二 この句の登場人物はどこにいて何をしているか。次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 岩の手前にいて、月光に映る岩影を見ている。

イ 岩の横にいて、岩の表面が月に光るのを見ている。

ウ 岩の先端にいて、そこから月を見ている。

エ 岩の真上にいて、風に当たっている。

問三 冒頭の句について、次の①～③のように行動したのはだれか。それぞれあとのア～ウの人物から選び、記号で答えなさい。

①「月の客」を「月の猿」と変えたら、漢詩的な趣が出てよいと考えた。

② 岩のところで一人で月見をしている人を見て、風流だと思った。

③ ここにも一人、月を見る客がいるぞと、自分で名乗り出た。

ア 先師 イ 去来 ウ 酒堂

問四 〰〰線「作者」とはだれを指すか。次のア～ウの人物から選び、記号で答えなさい。

ア 先師 イ 去来 ウ 酒堂

問五 本文中に「先師」として登場している人物の代表的な作品として、「奥の細道」が挙げられる。この先師とはだれか。

次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 与謝蕪村 イ 小林一茶 ウ 正岡子規 エ 松尾芭蕉

国語解答用紙

※印の枠内には記入しないで下さい。

一				
問三	問二			問一
1	1			1
	c	b	a	
2	2			2
3	c	b	a	3
4	3			4
	c	b	a	
5	5			5

※

二							
問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	
						④	①
						⑤	②
							③

※

三					
問六	問五	問四	問三	問二	問一
		第二			①
					②
		第三			③

※

四			
問四	問三	問二	問一
	①		季語
問五	②		季節
	③		切れ字

※

受験番号
氏名

※